

西南学院小学校 学校長メッセージ

「学校通信 Wings 2021年5月号」

希望はわたしたちを欺くことはありません。

ローマの信徒への手紙 5章 5節

風薫る季節となりました。新年度がスタートして約3週間がたち、子どもたちも新しいクラスに慣れてきたようです。1年生も毎日元気に登校しています。2年生が先生に「1年生に癒されます」と言ったという微笑ましいエピソードも届きました。明日からは5連休。5月の2日と3日に開かれる博多どんたく港祭りには、毎年西南学院の一員として、希望者を募り大学生と一緒にパレードに参加していますが、残念ながら今年も昨年に引き続きパレードは中止となりました。5月は、新年度スタートの緊張からくる疲れが表れる時期でもあります。どうか連休中は体調管理と感染防止に注意して楽しくお過ごしください。

ところで、「不易と流行」という言葉がありますが、初等教育の本質、また教師としてあるべき姿は、どのような時代になっても変わることはないと思います。それらを学ぶ上で、私にとって範となる1人に斎藤喜博という実践者がいます。もうずいぶん前に亡くなりましたが、今でもときどき著書を読み返しては刺激を受けています。以前、その斎藤喜博が、芸術教育について書いた文章に出会い大変感銘を受けました。芸術教育の本質は、人格形成にも関わる奥深いものだと思います。少し長くなりますが、ご紹介します。

(農村の母親たちが作っているコーラスグループのことを挙げて) 歌ったり話し合ったりすることによって、この人たちは、自分の心を解放しているのだ。表現が人間を解放しているのだ。だから「コーラスにばかり行っている」と言われても、苦しい生活をしていればいるほど、そしてそういう生活の中にも、より高いものを求める心があればあるほど、どんな思いをしてもコーラスへ出てきて歌わずにはいられなくなるのだ。～中略～私は、芸術の本質は、一つは、こういうところにあるのだと思っている。

芸術はまた、ものの考え方を転換させてくれる。優れた芸術にふれ、芸術的感動を受けたとき、新しい別の次元へと自分が変革されてゆくことを、私たちはときどき経験する。～中略～

芸術はまた、具体的なもので、端的にももの本質をつかむことができるのだが、そのためには、真実に対して鈍感であってはならない。よい音楽とか、絵とか、演劇とかが分からないということは、また、そういう表現ができないということは、その人が、真実に対して鈍感であるということを示している。そしてそのことは、その人が、自然とか人間とか社会とかに対しても、鈍感であるということを示している。

芸術において大事なことは、自然とか人間とか、社会とか芸術とかに対して、身震いするほど深く感動すること、深く愛すること、深くその本質をつきつめようと願うことである。だから芸術においては、芸術家である前に、人間であることが必要になる。そうならない限り芸術は分からないし、また、自然とか人間とか社会とかの、本質をすくなく見極めることもできない。

私は芸術を、そういう意味で尊重している。そして、そういう芸術の本質は、そのまま教育の本質とならなければならないと思っている。教師や母親が、そういう芸術の本質にふれた生き方をしたとき、本物の教育はできるのだと信じている。芸術教育も、そういうところから出発するのだと思っている。～中略～

教育の場合も、教師と子どもが全人的にものにぶつかって、音楽をやり、劇をやり、また授業

や行事をやったとき、優れた音楽や劇や行事ができ、その中で子どもも教師も母親も、しみじみと心を触れ合わせ、真実を追求し自分を変革していくような人間になっていく。

そう考えると、芸術教育というものは、ただ、図画とか音楽とか、演劇とか舞踊とかいう、いわゆる芸術教科だけで行われるものではない。授業とか、行事とか、学校全体の生活とかの中で、子どもを全人的に、感動深く生活させ、感動の質を高め、ものの本質を見極めさせていくような教育をして初めて達成できるものである。

算数とか国語とかの授業で得た、興奮や感動、新しい世界に入った喜びは、そのまま芸術の世界につながる。そういう世界を授業の中で体験している子どもたちは、一つの曲目と対決する場合も、図画を描く場合も、当然そういう追求の態度をもち、高い感動をもったものを表現しようとする。

行事の場合も同じである。～中略～授業とか行事とかが、芸術と同じ境地になったとき、その中で、芸術的な新しい人間の創造が、全人格的に行われるのだ。

(斎藤喜博著「授業入門」国土社刊より 一部要約) 下線は宮崎

子どもが全的に成長していくうえで、感動を体験することはとても大切なことだと思います。感動とは、心を揺さぶられるようなことだけではなく、日々の学びのなかでのちょっとした驚きや喜びをも含んでいるのではないのでしょうか。そのような学びができるよう、よりよい授業や行事のあり方を目指して、今年度も研修や授業研究に取り組んでまいります。

文責 宮崎 隆一